対象の見出されないことが可能な空間―「超越論的感性論」§2 第 2 論証の検討

東京大学　福地信哉

序

本稿は、カント『純粋理性批判』（以下『批判』）「超越論的感性論§2 空間概念の形而上学的究明」（以下「究明」）に含まれている第 2 論証の解釈を目的とする。この箇所は『批判』の一連の論証の発端であるにもかかわらず、解釈史上冷遇されがちであったと言ってよい。典型例として、Strawson（1966, 59）は「このように説得力の乏しい論証をあれこれ考えるだけでは、ほとんど得るところがないことは明らかである」と断じている。しかし後に見る通り、この論証には空間が主観的形式であるという超越論的観念論の主要テーゼの内実が示されており、これを無視することはできない。当の主要テーゼを以下では主観性テーゼと呼ぼう。「究明」の第 2 論証から主観性テーゼの内実を理解可能な仕方で取り出し、空間についてのカントの見解を明らかにすること、これが本稿の目標である。

本稿が具体的に第 2 論証から取り出す主張は、空間内に対象が見出されないことが可能であると理解する能力に、空間が依存しているというものである。行論は次の通りである。第 1 節では本稿で解かれるべき問いを正確に立てる。そのためにまず、「究明」全体の問いを確認し、第 2 論証のなかでとりわけ論争的な部分を剔抉して、本稿が採用する解釈上の立場を明示する。それによれば、第 2 論証で考察されているのは、認識者を含む一切の存在者を欠いても存立する空間ではなく、私たちの認識実践における空間である。その上で次の 3 つの問題が立てられる。（i）カントが述べている、対象が見出されない空間とはいかなるものか、（ii）空間が私たちに特有の主観的形式であるとはどういうことか、そして（iii）カントの支持する超越論的観念論と、彼が拒否しようとしている超越論的実在論はいかなる関係に立つのか、これである。

第 2 節では次のようにしてこれらの問題に回答する。（i）対象が見出されない空間ということで念頭に置かれているのは、実際は粒子などが存在しうるにもかかわらず、私たちの感覚の有限性のゆえに対象の知覚がなされない状況である。（ii）こうした対象なき状況が可能であるという了解を含む空間理解こそがカントの取り出そうとしたものである。この理解の下での空間とは、感覚の有限性やある種の知的能力に依存するという意味で主観的である。（iii）超越論的観念論とは、空間という語の指示をこの意味に限定する立場

であり、対して超越論的実在論の一種たる絶対空間説は、与えられた状況を対象なき状況として捉える私たちの主観的な仕方を、実際に世界において成立している事態と取り違える立場と解されることになる。

1　問題の設定

1.1「究明」の問いと第 2 論証

「究明」の冒頭でカントは、次のように問いを立てる。

> [...]空間および時間とは何か？　これらは現実的存在者なのか？　これらはなるほど物の規定あるいはまた関係に過ぎないが、とはいえやはり[...]物それ自体にも帰属するようなものなのか、あるいはそれらは直観の形式にだけ、それゆえ私たちの心の主観的性状にのみ貼り付いており、この性状なしにはこれらの〔空間および時間という〕述語は決していかなる物にも付加されえないのだろうか？（A23/B37–38）

一般的な整理に従ってまとめよう(1)。ここでは空間の存在論的な身分について、少なくとも 3 つの選択肢が挙げられている。第 1 は私たちの認識様式から独立の存在者である（いわゆる絶対空間説）。第 2 はそうした存在者の間の関係である（いわゆる関係説）。第 3 は主観的形式である。感性論全体でのカントの目標は、このうち第 3 を、本稿の呼称では主観性テーゼを支持することである。

さて、「究明」の第 1 および第 2 論証は、空間が主観的な形式であり(2)、そうしたものとして外的経験に先立つ、すなわちアプリオリであると主張する。第 1 論証は空間の関係説（上掲の第 2 の選択肢）に抗して、第 2 論証は後に見るようにいわゆる絶対空間説（第 1 の選択肢）との緊張関係において、この主張を行っている。2 つの論証は論理的に独立であり、別々に検討することが許される(3)。ここでは本稿が考察する第 2 論証のみを掲げておこう。

> 2）空間とはあらゆる外的直観の根底に存しているアプリオリな必然的表象である。ひとは、空間が存在しないということを表象することが決してできないのであって、いかなる対象も空間の内に見出されないということは全く十分に考えられるにもかかわらずそうなのである。空間は、したがって現象の可能性の条件とみなされ、現象に依存する規定とはみなされず、そして外的現象の根底に必然的な仕方で存しているアプリオ

リな表象なのである。（A24/B38–39）

論証は 3 文から成る。第 1 文では結論が先に示されている。空間のアプリオリ性がそれである。

第 2 文は論証の前提として、空間と対象の間のある種の非対称性を述べている。一方に、空間の不在は表象できないという前提がある。他方で、空間内での対象の不在は十分に考えられるという前提がある。この 2 つの前提の真偽については 4 通りの可能性があるが、カントの目的のためにはいずれの前提も真である必要があることを確認しておこう。前者が真で後者が偽であれば、空間の不在も対象の不在も考えられないことになる。前者が偽で後者が真であれば、空間の不在と対象の不在の双方が考えられることになる。そのいずれの場合でも空間と対象の間には特段非対称性は認められない。また、前者が偽で後者も偽であれば、空間の不在が考えられ、対象の不在は考えられないことから、空間に対して対象が優位に立つことになり、プライオリティが逆転してしまうのである。したがって、前者が真、つまり空間の不在は表象できず、かつ後者も真、つまり対象の不在は考えられるという必要がある。

続けて第 3 文では、第 2 文の両前提から結論が引き出される。空間は外的現象を可能にしている条件であり、逆に外的現象に依存しているということはない。この意味で空間はアプリオリである、と。

1.2 第 2 文の 2 つの解釈問題と、本稿の方針と課題

この論証の中で大きな反発を呼んできたのは「いかなる対象も空間の内に見出されないということは全く十分に考えられる」という第 2 文後半の前提であった。これに関連する主だった 2 つの問題を取り上げ、それへの態度の取り方によって本稿の解釈の方位を定めることにしよう。そして本節最後で、その方針の下で解かれるべき課題を設定する。

1 つ目の問題を述べよう。空間内に対象が見出されないとはいかなる状況なのか。大きく分けて 2 つの解釈が考えられる。1 つ目は、空間が認識者を含めていかなる存在者も含まずして存立している状況である(4)。以降ではこの状況を実在的空虚と呼ぶことにしよう。2 つ目は、存在者の実際上の有無にかかわらず、私たちが対象を見出すことができないという状況である。これを認知的空虚と呼ぼう。カントが問題にしていたのは実在的空虚なのか、あるいは認知的空虚なのだろうか。

実在的空虚であるとする読みには複数の問題がある。第 1 に、つとに Riehl（1879, 101）が指摘していたように、このような空間を考えることが「全く十分に」できるということは非常に疑わしい(5)。

第 2 に、認識者を含まない、認識実践から切り離された空虚な空間についての考察から、それが「あらゆる外的直観の根底に存している」として、それが認識実践における基礎を成しているという結論に至るとすれば、カントはここで飛躍をしていることになってしまう。

これらの困難に際してもなお、あらかじめ認識実践の場面に定位して空間を考察するよりもむしろそうしない方が議論の進行として適しているのだ、と思われるかもしれない。カントの目論見は、空間の存在論的身分についての複数のオプションからそのうち 1 つを選択することであった。そうである以上、議論はこれらの選択肢に対して中立的にスタートし、どの立場も認めざるをえない空間のアプリオリ性を確認し、それを満たす唯一可能な選択肢として主観性テーゼを採用する、というように進むべきではあるまいか。しかし、感性論§7 の文言を見よう。カント曰く、「空間と時間の絶対的実在性を主張する人々が、それらを実体として自存するものとみなす」（A39/B56）場合、

> 彼らは二つの永遠で無限なそれだけで存立する不可解な物[Undinge]（空間と時間）を想定せざるをえない。それらは、（何らか現実的なものであることなしに）ただ、全ての現実的なものを自分のうちに包括するためにのみ存在するのである。（ibid.）

ここでは、認識者を含めて存在者を一切欠いても実在する実在的空虚としての空間が「不可解な物」と呼ばれている。後にはこの想定が「不合理[Ungereimtheit]」（B70）と糾弾される。この意味での空間を第 2 論証第 2 文に読み込むことは、そこで空間内に対象が見出されないことが「十分に考えられる」と明言されていることと衝突するのである。これがこの読みの第 3 の困難である(6)。こうして、第 2 文に実在的空虚としての空間を読み込む解釈には、複数の回避しがたい難点がある。また、カントの立場からして、実在的空虚としての絶対空間という考えがどのような誤謬と診断されるのかということについても、後の 2.3 節で明らかにすることにしたい。

これに対して、この箇所では私たちが具体的に外的経験をする際に出会われうる認知的空虚が問題になっているのだとする解釈を打ち出したのが久保

（1987, 38–60）である。本稿はこの線に沿って議論を進めることにしたい[7]。

だが先に進む前に、2 つ目の関連する解釈問題を扱っておこう。第 2 文を再掲する。

> ひとは、空間が存在しないということを表象することが決してできないのであって、いかなる対象も空間の内に見出されないということは全く十分に考えられるにもかかわらずそうなのである。（A24/B38–39）

一方で空間の不在は表象する（Vorstellung machen）ことができないと言われ、他方で対象の不在を考える（sich denken）ことはできるとされている。ここで、空間と対象の非対称性を主張するためには、その比較の基準が揃っている必要がある。極端な例を挙げれば、空間の不在を感覚することはできないが、対象の不在を崇拝することはできるということからは、空間が対象に先立っていると結論することはできないだろう。しかしカントはここで比較の基準を極めて曖昧にしているため、解釈の必要が生じる。非対称性を掬うためには、カントがここで双方の命題に対してどのような態度をとっていると理解するべきだろうか。一方で、表象するという態度はあまりにも多義的であるため、理解を進展させることは難しい[8]。他方で、カント的語用法によれば私たちは非空間的な物自体についても思考できるので（Bxxvi–Bxxvii）、態度をこれに揃えると、空間の不在を表象できない（＝思考できない）と主張する前半部と齟齬をきたす[9]。

Falkenstein（1995, 198）の提案に従って、本稿は、当該の態度が、しかじかを経験可能な事態として考える、というものであると読むことにしたい。第 2 文でのカントの主張は、空間がないことを経験可能な事態として表象することができない一方、空間内に対象が見出されないことを経験可能な事態として考えることができる、というものである。この前半部が意味しているのは、この世界において空間が存在しない状況が経験可能であるということを私たちが理解できないということである。これはもっともらしい主張であろう。

依然としてこの解釈方針の下で課題となるのは、第 2 文後半部で言われている、空間内に対象が見出されないことを経験可能な事態として考えるとはどういうことか、というものである。先ほど本稿は、第 2 文が私たちの外的経験の場面を念頭に置いているとする久保（1987, 38–60）の線を採ると方針

決定した。彼の説明を聞くことにしよう(10)。

> 私の前方の、遠近や方向・方位などにおいてそれぞれ異なる場所に、如何なる対象も見出されないという場合を考えるのは非常にたやすい—。[...]第二文章が全体として言おうとしているのは、私の前方の奥行きのなかに偶如何なる対象も見出されないという場合をも含めて、形式としてのこの空間は常に変わりなく、そこに登場してくる事物に外的経験の対象と呼ばれる資格を初めて付与する、そういう地平を形成しているということなのである。（久保 1987, 55）

久保によればカントが扱っているのは、認識者が前方に対象を見出すことができないという場面である。これは、経験に定位した極めて明快な解釈だろう。しかしながら（i）「如何なる対象も見出されない」とはどういうことか、彼が立ち入った説明を加えているわけではない(11)。また、（ii）「私の前方」に広がる「地平」としての空間が私たちに特有の主観的形式であるとはどういうことか。空間が私たちの能力に依存するといっても、それが依存する能力とは具体的にどのようなものなのだろうか。これについてもさらなる検討が必要だろう。さらに、認識者や物が全く存在しなくても実在する絶対空間を支持する超越論的実在論の一種を、カントが「不合理」と断じているのを上で見たが、（iii）この立場とカントの立場との関係、超越論的実在論がどのような事情で生じた誤りなのか、これもまだ明らかでない。しかし、それなしにはカントが自身の設定した課題を遂行しているとは言いがたい(12)。上で見たように、彼は空間の存在論的身分についての複数の選択肢の中から、主観性テーゼを選ぶことを課題としていた。そうである以上、その他の選択肢の誤りについての診断がカントには期待されるのである。さもなければカントは第 2 文で直観の形式としての空間を独断的に支持しているにすぎないと言われてもおかしくはないだろう。

以下ではこれらの課題に取り組むことにしよう。

2. 認知的空虚が可能な空間

（i）対象が見出されない空間とは何か、（ii）空間が私たちに特有の主観的形式であるとはどういうことか、そして（iii）超越論的観念論と超越論的実在論はいかなる関係に立つのか、これらが以降の課題である。順に検討してゆこう。それによって、空間内に対象が見出されないことが可能であると理

解する能力に、空間が依存しているという、本稿が主観性テーゼの内実として特定する事柄が明らかにされるだろう。

2.1 認知的空虚

空間内に対象が見出されないとはどういうことか。これは目の前の空間が一切の存在者を欠いていること、それが空虚な空間であることを意味しているのだろうか。そうではないと考えるべき理由がある。例えば、暗闇に宙づりにされている場面を考えよう。辺りは見渡す限り闇に包まれており、音は聞こえず、手足を掻いても確たる感触がない。しかし、目や耳や手足で感知することはできなくとも、空気中には無数の分子が存在しており、そこは空虚な空間とは言えない。あるいは、より洗練された状況として、絶対零度の真空内を遊泳していることが考えられるとしよう。しかし、真空中にも多数の粒子が存在し、生成消滅を繰り返していることが知られている(13)。一切の存在者を欠いた、文字通り空虚な空間に直面している状況を考えるのは、極めて困難なのである。

代案を出そう。ここで言われているのは、実際にはある種の存在者があるものの、私たちの側の事情でそこに対象を見出せていない認知的空虚である。次のような事情が考えられる。暗闇の中、私たちの触覚の精度がそこまで高くないために、分子が感触されない。バクテリアの微弱な活動音を聴覚で拾いとることができない。また、視覚の範囲が限定されているために、ガンマ線や赤外線や電波の反射を見ることができない、等々。感覚の肌理の粗さや範囲の限定性のゆえに、対象を見出せない状況が考えられるのである。

ここで、次のような反論を予期しなければならないだろう。第 3 文をカントは以下のように結んでいたが、この解釈ではこの結論が不当になるように思われるのである。

> 空間は、したがって現象の可能性の条件とみなされ、現象に依存する規定とはみなされず、そして外的現象の根底に必然的な仕方で存しているアプリオリな表象なのである。（A24/B38–39）

暗闇の例で対象が見出されないとされていた空間は、実際にはその内部に存在する分子に依存する規定であるかもしれない。また、より洗練された可能性として、空間は実際には真空内の粒子に依存した規定なのかもしれない。そして、私たちが外的対象と出会う事例、および出会うことができず空虚な

空間を見とめる事例の全てに共通する空間内の存在者がもしあるのならば、むしろ空間は当の存在者に依存していると結論することはもっともらしいだろう。言い換えれば、第 3 文でアプリオリな表象として引き出されるべきは、空間およびそれが依存している当の存在者であるかもしれない。なぜカントはこうした懸念を無視し、空間が現象から独立していると主張できるのだろうか。

2.2 空間の主観性テーゼ

それはまさに第 2 文でカントが空間概念の捉え直しを行っているからなのである。彼はここで、たんに私たちの感覚の性状のために対象が見出されない状況を対象なき状況とみなすような、私たちの為すある種の理想化を、空間把握の要件として発見し、またそれを読者に発見させているのである。

暗闇に宙づりにされた場合において、私たちは日々それに携わって生活しているテーブルや手拭きや米粒などの中間サイズの対象が存在しないことを認知する。そして暗闇しか見えず、耳を澄ましても何も聞こえず、手足を動かしても何にも触れることができず、無臭である当の空間について、日常的な語りにおいて私たちは、そこに対象が存在しないと述べる。暗闇が空気中の無数の分子を含んでおり、また超音波が振動しているかもしれない…にもかかわらずそうなのである。こうした、感覚にとっての限界状況において、私たちは、周囲に空間があるという考えを保持しつつも、その中に対象がないと考えるのである。ここで私たちはある種の理想化を行っていると言うことができる。すなわち、ミクロのレベルでは何か対象が存在するのかもしれないが、あくまでも感覚されているものに限るなら対象が存在しないことを踏まえて、日常的な語りにおいてある種の誇張を行うのである。感覚にとっての限界状況において、私たちは存在する空間と存在しない対象という対比を用いる。実情はそこまで截然としていないにもかかわらず、そのように捉えるのである。カントが空間概念を分析する中で辿り着いたのは、感覚の限定された私たちに特有のこうした理想化の仕方に他ならない(14)。

この理想化はどのような意味で私たちに特有なのか。第一に、仮にミクロなレベルまで感覚の行き届く生命体や、あるいは何らか別種の認識者が存在する場合、彼らはこのような把握を行わなかったであろう。感覚の限定性のゆえに対象が見出されない、という状況がそもそもないだろうからである。第二に、存在する空間と存在しない対象という截然とした区別を行う能力のない主体もまた、この把握に至ることはできない。なるほど一部の動物や乳児であっても奥行きを知覚する(15)。しかし彼らの少なくとも一部が、暗闇に

投げ込まれても、存在する空間と存在しない対象へと与えられた状況を分節しないということは自然に思われる。こうして、当の理想化は、感覚の肌理が粗かったり範囲が限定されていたりすること、そして存在する空間と存在しない対象を区分するある種の知的な能力を、それぞれ必要とする(16)。

そして、このように空間が認知的空虚でありうるという理解を含む空間把握こそ、カントが取り出そうとしたものである。さらに、この把握をするためには、たんに対象の与えられている状況において奥行きを知覚するだけでは十分でない。その中に対象が見出されないことも可能な領域として空間を理解することが加えて必要なのである。例えば、「私は今テーブルと皿とハンバーグを目の前にしているが、宇宙遊泳に行けば周囲には何も見当たらないだろうし、またこの部屋から出ないにしても、明かりを消して宙づりにされた場合には、テーブルも皿もハンバーグも…見出されなくなるだろう」というように。空間は、感覚の有限性、存在／非存在の知的区別、そして対象が見出されないある種の反事実的な状況の理解といった、私たちに特有な性状に依存するという点で主観的なのである。そして、そうであればこそ、私たちの能力に依存して把握される限りの空間が、その内部に配置される対象に対して先立っている、すなわちアプリオリであると結論することができるようになるのである。

まとめよう。空間はいかなる意味で主観的なのか。空間は私たちのどのような能力に依存しているのか。これが本節の問いであった。回答しよう。認知的空虚でありうると理解される限りでの空間は、第 1 に、感覚の有限性を、第 2 に存在／非存在の知的区別を、第 3 にたんに対象が与えられた状況に対処するだけでなく、当の領域に対象が見出されないことが可能であるという理解を、それぞれ必要とするのである。空間はこれら少なくとも 3 つの私たちに特有の性状に依存しており、これを取り出すことがカントの目論見であった。このようにして主観性テーゼを支持してこそ、空間がその内部に配置される対象に対して先立っていると主張することが可能になったのである。

2.3 超越論的観念論からの飛躍としての超越論的実在論

さて、認識者や物を一切欠いても存在する絶対空間の想定を、カントは「不合理」として退けたのであった。しかしこの想定がどのような事情で生じた誤りなのか、これについてはこれまで述べてこなかった。今やそれを見て取ることができる。それによってまた、第 2 文でいきなり直観の形式としての空間に言及することが不当でない所以が明らかになる。

絶対空間説は、空間を認識者の性状に依存しない存在者とみなしている。

絶対空間は、認識者を欠いても存在するとされているからである。しかしそうした空間の想定は直観の形式としての空間からの飛躍に他ならない。これがカントの洞察である。第 2 文で発見されるように、私たちの感覚の有限性のゆえに対象が見出されない状況を、対象が存在しない状況とみなすという、私たちに特有の理想化がある。絶対空間説は、この理想化する把握が、感覚の有限性や、存在と非存在を区別する知的能力に依存するという点を見落とす。そして、私たちと無関係に実際に理想的な、いかなる存在者も欠いた状況でも存在する存在者という考えに移行する。それは、認識者の構えと一切関係がなく、かつ「(何らか現実的なものであることなしに) ただ、全ての現実的なものを自分のうちに包括するためにのみ存在する」(A39/B56) ものとして要請されることになる。その結果、空間の身分は不可解なものになってしまう。対象が見出されなくても、認識者の構えに依存するものとして厳然と存在していた空間が、いまや認識者から切り離されることによって、対象から区別されるがゆえに空虚でもなお存在する、「現実的なものであることなし」の存在者と化してしまう。一言でいえば、絶対空間説は認知的空虚から実在的空虚へと移行することによって不透明な考えに陥るのである。この飛躍を断ること、これこそが感性論のテクストに伏在しているカントの思考である。当の飛躍の手前に立ち止まり、以降で空間という語の指示を、認知的空虚が可能であると理解する私たちの能力に依存した空間に限定するという宣言が超越論的観念論に他ならない(17)。次の批判期の遺稿はこの線の理解と調和するものである。

> 観念論のように見える私の立場は、感性的直観を単なる経験へと制限するものであり、私たちが感性的直観によって経験の限界を超えて物自体そのものへと逸脱しないよう防止するものである。この立場は単に、ひとが表象を事象とする、超越論的な取り違えの誤謬(vitii subreptionis) を防止するものにすぎない。かつて私はこの理説を超越論的観念論と名付けたが、それはこのような理説のための〔適切な〕名前をひとが〔他に〕有していないからである。(R5642, XVIII 279, 1780–1783 頃(18))

直観の形式としての空間を発見すること、そしてその発見によって超越論的実在論が飛躍であることを了解させ、その手前に立ち止まることを宣言すること、これが感性論の第 2 論証に関連する部分で採られている手続きである。超越論的実在論は、超越論的観念論からの飛躍として拒否されている。カン

トは決して第 2 文で独断的に直観の形式としての空間を前提しているのではない。むしろ、絶対空間という考えの根をそこに突き止めているのである。この極度に圧縮された論証からは、カントの立場の積極的提示と対抗見解の誤謬の診断を共に読み取ることができるのである。

結論

改めて本稿の成果をまとめよう。本稿が第 2 論証から取り出したのは、認知的空虚が可能であると理解する能力に、空間が依存しているという主張であった。具体的に議論は次のように進められた。第 1 節では、第 2 論証で考察されているのが私たちの認識実践の場面における空間であるとして本稿の解釈方針を決定した。その上で立てられた本稿の問題は、(i) 対象が見出されない空間とは何か、(ii) それが私たちに特有の主観的形式であるとはどういうことか、そして (iii) 超越論的観念論と超越論的実在論はいかなる関係に立つのか、これであった。

第 2 節では以上の問題に回答を与え、それによって、認知的空虚が可能であると理解する能力に、空間が依存しているという考えをある程度明らかにした。(i) 対象が見出されない空間ということで念頭に置かれているのは、実際は粒子などが存在しうるにもかかわらず、私たちの感覚の有限性のゆえに対象の知覚がなされない認知的空虚である。(ii) そうした状況は私たちによって対象なき状況として理想化されるが、こうした認知的空虚が可能であるという理解を含む空間把握こそがカントの取り出そうとしたものである。認知的空虚の可能な空間は、感覚の有限性、存在／非存在の知的区別、対象が見出されないある種の反事実的な状況の理解といった、私たちに特有な性状に依存するという点で主観的である。(iii) 超越論的観念論とは、この意味での空間に、空間という語の指示を限定する立場である。超越論的実在論の一種たる絶対空間説は、認知的空虚から現に世界で成立している実在的空虚へと飛躍する立場なのである。もとより問われるべき事柄は残っているものの、一定の前進を果たしたとしてここで本稿を閉じることにしたい。

注

1. 例えば Falkenstein（1995, 147）を参照。
2. 「形而上学的究明」は空間のアプリオリ性のみを扱っており、主観性テーゼは感性論の後続部分を俟って初めて導入されるという見方がある。近年では例えば Allison（2004, 118）、Shabel（2004, 206–207）を参照。他方、Brandt（1998, 90）、久保（1987）は「形而上学的究明」で

すでに主観性テーゼが提示されていると見ている。本稿は後者に与する。ただし、主観性テーゼの十全な正当化が「形而上学的究明」のみでなされているとまで主張するつもりは毛頭ない。それには感性論の後続部分やアンチノミーの検討を要する。本稿のポイントはあくまでも、主観性テーゼの内実を「究明」から的確に読み出すことにある。

3. Vaihinger（1881, 197）を参照。
4. Riehl（1876, 347–348）、Ströker（1987, 165）、Vaihinger（1881, 186）を参照。
5. 久保（1987, 49–50）も参照。Kemp Smith（2003, 104–105）はより強く、これが偽であると端的に断じている。
6. これは久保（1987, 52）がすでに指摘している。
7. 簡短のため本文では検討しなかったが、これらの選択肢とはさしあたって別に、対象を捨象して空間だけを残すことができると読む向きがある。これには細かなヴァリエーションがありうる。第一に、色や匂いや固さなどを物体から捨象して、その拡がりと形のみを残す、とする読みがある（Allison 2004, 108）。この場合、まさしく物体の拡がりと形が残されているにもかかわらず、それがテクストでは対象の見出されない空間と表現されていることになるが、それは若干不自然である。第二に、物体の拡がりや形を残さず、それらが未規定の空間だけを残すことができるとする読みがある。Paton（1936, 112–114）はこの解釈を採っていると思われる。彼はこれによって残される空間を、実在的空虚と考えているのかもしれない。この線は上で述べた理由から採れない。あるいは彼は後述する本稿に近い見解を持っていたのかもしれない。いずれにせよ彼以上に立ち入った説明は求められるだろう。
8. A320/B377 を参照。
9. Falkenstein（1995, 187）、Kemp Smith（2003, 104）、Parsons（1992, 68）を参照。
10. 両命題に対する態度を何と読むか、久保が明言しているわけではないが、本稿の解釈と少なくとも両立可能だと思われるため、ここで久保に訴えることに問題はないだろう。
11. この点について Falkenstein（1995, 212–213）は、感覚の度を 0 に近似するということに着目しつつ説明しようとしているが、その内実は明らかでない。
12. 例えば Falkenstein（1995, 147）は、カントが彼自身の設定した課題に取り組むことができていないとする。しかし以下の解釈が正しけれ

ば、それは早急であったことになる。

13. 山田（2013, 10–19）を参照。
14. これでは私たちの理想化の仕方としての空間は、微小な存在者の占めている空間とは別物であるという不可解なことになってしまう、と思われるかもしれない。そうではない。微小な存在者であっても、器具を用いた観測や、それが物体に与える影響などを介して感覚と結び付けられることによって、当の理想化された空間の中に配置されるのである。A225–226/B273 を参照。
15. 鶴原（2011）、Uexküll（1973, 31）を参照。
16. 空間把握が可能であるためには悟性が必要であるというのは演繹論で提示される見解である。B160–161 を参照。この点については福地（forthcoming）にて検討を試みた。
17. この立場ではそれゆえ、物自体が空間的であると語ることはカテゴリーミステイクになる。これが物自体の「非空間性」の意味するところである。
18. これは 1782 年のゲッティンゲン書評に触発されて書かれたと推測される遺稿である。城戸（2014, 32）を参照。

文献表

『純粋理性批判』からの引用にあたっては、慣例に倣い、第一版を A、第二版を B として、その後に頁数を本文中に付す。翻訳の底本には、Philosophische Bibliothek 版（Kant 1998）を用いた。アカデミー版カント全集第 III 部「手書きの遺稿（Handschriftlicher Nachlaß）」に収められている断片（いわゆる Reflexionen）については、R の略号・アカデミー版の通し番号、巻数・ページ数、アディッケスによる推定年代の順に記す。引用文中の傍点は、原文の隔字体に対応する。丸括弧 () は原著者によるものである。補足のために角括弧〔〕を、意味上の区切りを見やすくするために山括弧〈〉を、それぞれ引用者が挿入した。

Allison, Henry E., 2004, *Kant's Transcendental Idealism. An Interpretation and Defense*. Yale University Press.

Brandt, Reinhard, 1998, “Kants Transzendentale Aesthetik, §§1–3", in Immanuel Kant: Kritik der reinen Vernunft, Eds. G. Mohr/M. Willaschek, Berlin, 81–106.

Falkenstein, Lorne, 1995, *Kant's Intuitionism: A Commentary on the*

Transcendental Aesthetic. University of Toronto Press, 1995.

Kant, Immanuel, 1928, *Kant's gesammelte Schriften*, Hg. von der Preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 18.

---, 1998, *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner Verlag.

Kemp Smith, Norman, 2003, *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason': with a New Introduction by Sebastian Gardner*, Palgrave Macmillan.

Messina, James, 2015, "Conceptual Analysis and the Essence of Space: Kant's Metaphysical Exposition Revisited". *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 97, (4), 416–457.

Parsons, Charles, 1992, "The Transcendental Aesthetic", in *The Cambridge Companion to Kant*, Ed. Paul Guyer, Cambridge University Press, 62–100.

Paton, Herbert J., 1936, *Kant's Metaphysic of Experience*, Macmillan, Vol. 1.

Riehl, Alois, 1876, *Der philosophische Kriticismus und seine Bedeutung für die positive Wissenschaft*, Bd. 1: *Geschichte und Methode des philosophischen Kriticismus*, Verlag von Wilhelm Engelmann.

---, 1879, *Der philosophische Kriticismus und seine Bedeutung für die positive Wissenschaft*, Bd. 2, Teil 2: *Die sinnlichen und logischen Grundlagen der Erkenntnis*, Verlag von Wilhelm Engelmann.

Shabel, Lisa, 2004, "Kant's "argument from geometry"", *Journal of the History of Philosophy*, 42, (2), 195–215.

Strawson, Peter F., 1966, *The Bounds of Sense: An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, Routledge Taylor ¥& Francis Group.

Ströker, Elisabeth, 1987, *Investigations in Philosophy of Space*, Trans. Algis Mickunas, Ohio University Press.

Uexküll, Jakob von, 1973,『生物から見た世界』，日高敏隆・野田保之訳，思索社，1973 年.

Vaihinger, Hans, 1881, Commentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft, Union Deutsche Verlagsgesellschaft, 2. Aufl, Bd. 2.

城戸淳，2014,『理性の深淵　カント超越論的弁証論の研究』，知泉書館.

久保元彦，1987,「形式としての空間―「超越論的感性論」第二節、第一および第二論証の検討」,『カント研究』，創文社，5–69 頁.

鶴原亜紀，2011,「空間知覚の成立」,『心理学研究法』，4，山口真美・金沢創

編著，大山正監修，誠信書房，93–110 頁.
福地信哉，forthcoming,「『純粋理性批判』第二版演繹論における量カテゴリーの客観的妥当性」,『哲学の探求』，第 47 号，哲学若手研究者フォーラム.
山田克哉，2013,『真空のからくり　質量を生み出した空間の謎』，講談社.